

1) ユウガオ=夕顔

ユウガオと呼ばれるものには2種類ある。一つはヒルガオ科のユウガオ属で、熱帯アメリカを原産とし、明治の初めに渡来した。もう一つがこのウリ科の一年草で、同じウリ科のヒョウタンとも近く、西アフリカ原産でカンピョウの原料になる。このユウガオはツル性の茎が10m以上も伸び、巻きヒゲを出して他のものにかからみ着く。葉はハート形もしくは腎臓形で、白い花は夕方に関花して翌朝には萎んでしまう。和名のユウガオはこのために名付けられたもので、タソガレソウなどという地方もある。学名をフルに記すと『*Lagenaria siceraria* Standl. var. *hispida* Ser.』で、属名はラテン語で「ビン」を意味し、変種名の『*hispida*』は「毛深い」という意味で、これは『マルユウガオ』の変種名である。一方、『ナグユウガオ』の変種名は『*clavata*』で、これは「棍棒状」という意味である。中国でもこの植物のことを「壺盧」と呼んでおり、どれも果実の形状に由来している。ユウガオは雌雄異花で、雄の花と雌の花がある。花が終わるとナグユウガオは約1カ月で60cm~1mに達する大型の果実が熟し、完熟するとヒョウタンのように外果皮が固くなる。マルユウガオの果実は直径が30cm、重さは30kgになるものもあり、果実の柔らかいうちに収穫して、皮を機械で剥いで天日にさらし、干瓢(カンピョウ)を作る。中国でも干瓢は「瓠畜(コチク)」という名前前で、文献にも登場する。3~4世紀ごろから皮を剥いで貯え、冬期の食料としたことが『釈名』(シヤクミョウ)という書物に記され、6世紀の『芥民要術』(セイミンヨウジュツ)にもその名が見える。ナグユウガオは干瓢にはあまり向かず、煮て食用とするが、ユウガオは世界最古の農産物の一つで、台湾や東南アジア諸国、インドなどでは生鮮野菜として広く食用にされて来た。『枕草子』では次のように記されている。

夕顔は、花の形も槿(アガオ=当時は「木槿」も朝顔と呼んだ)に似て、いひつづけたるに、いとおかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそいとくちおしけれ。

[中略] 夕顔といふ名ばかりはおかし。しもつけの花。蘆の花。(65段)

これは実のありさまが余りにも大きいことをいったものであろう。

一方、紫式部の『源氏物語』には頭中将の愛人として「夕顔」が登場する。夕顔は玉鬘(タマカズラ)を出産するが、正妻方に脅され身を隠す。光源氏はそうとも知らずに夕顔を溺愛する。光源氏の正妻は頭中将の妹に当たるのだが、「夕顔」の冒頭には、病に伏した乳母を惟光(コレミツ)と見舞いに行くところがあって話は進む。因みに惟光の母が光源氏の乳母に当たり、二人はいわゆる乳母子(メノトゴ)であった。

切懸(サカサ)だつもの(垣根のこと)に、いと青やかなる葛(カヅラ)の心ちよげに這いかかれるに、白き花ぞおのれひとり笑(エ)みの眉(マユ)ひらけたる「をちかた人に物申す」とひとりごち給うを、御隨身(ミズイソ=近衛府などの護衛のための武官)ついで膝をついて座っていて、次のように言うのである、「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲き侍

(ハハリ)ける」と申す。

これは光源氏が夕顔と出会うところのひとこまである。「をちかた人に物申す」というのは『古今集』の、『うちわたす遠方人(オチカタヒト)にもの申す われそのそこに白く咲けるは何の花ぞも』という歌に由来し、この場合はそこに住む人のことを意味している。光源氏は一人この歌を誦ずさんで、花の名を尋ねたのである。この花は「あやしき垣根になん咲き侍ける」と言われているように、当時は庶民の家の軒先や荒れ果てた家の垣根などに多く見られたようで、ここに住まう人の身分を象徴している。そしてこの女主人を夕顔と名付ける理由が着々と準備され、『源氏物語』はさらに続く。

惟光(ユヅリ)に紙燭(シツク)召して、ありつる扇(アビ)御覧ずれば、もて馴(ナ)らしたる
移り香、いと染(シ)み深うなつかしくて、おかしうすさみ書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の 光添へたる夕顔の花

と語られているのである。この光はもちろん光源氏のこと、女はこの歌を贈ったために夕顔と名付けられるのである。そして光源氏はこの歌の返歌を自分の筆跡を隠すような文字を書いて夕顔に贈る。夕顔は当時から情交を暗示する花だったようで、このため自分が光源氏であることを相手に悟られまいとしたためであろう。返歌は

寄りてこそそれかとも見めたそがれに ほのぼの見つる花の夕顔

その意味は「もっと近寄ってみたら、黄昏に咲く美しい夕顔の姿がよく分かります」というものである。紙燭は今でいえば懐中電灯ということにでもなるか。

このように源氏物語の中には作者によって創作された和歌が多数見られ、それに当時の社会で広く知られていた『古今集』や『拾遺和歌集』などの和歌とが重なり合いながら、物語の余韻をいっそうのこと盛り上げている。この点においても当時の他の物語に抜きん出ていると見ることもできよう。

さて肝心の夕顔である。光源氏との逢瀬のさなか、物の怪に憑かれて儂い生涯を終わる。一日で散ってしまうこの花と、薄幸な生涯を閉じた夕顔とを重ね合わせたのだろう。『源氏物語』の中には桐壺に始まり帚木、この夕顔、葵、賢木(サキ)、蓬生、朝顔、常夏、藤袴、梅枝、柏木、紅梅、早蕨(ササビ)、宿木など、植物と関わりの深いものが極めて多く、54巻のうちのほとんど半分にあたる。これは当時すでに植物のもつイメージが貴族社会に周知され、花によって、言外の意味をも表現することができたからであろうか。一方『枕草子』の「木の花は」の項や「草は」「草の花は」などは、そのイメージを、作者自身の感慨を交えながら語ったものと解釈できるのである。

ユウガオはまた『延喜式』(927年)にも記され、大和の国の産物となっている。現在の生産地は栃木県で、これは1712年に近江の水口(ミナクチ)藩の藩主鳥居忠英(タダテル)が、下野(栃木県)の壬生(ミブ)藩に移封になったとき、奉行の松本茂右衛門(モエモン)に命じて栽培させたのが始まりと伝えられているが、前述の『枕草子』では「しもつけの花」とされているので、もっと早くから栽培されていたのかもしれない。



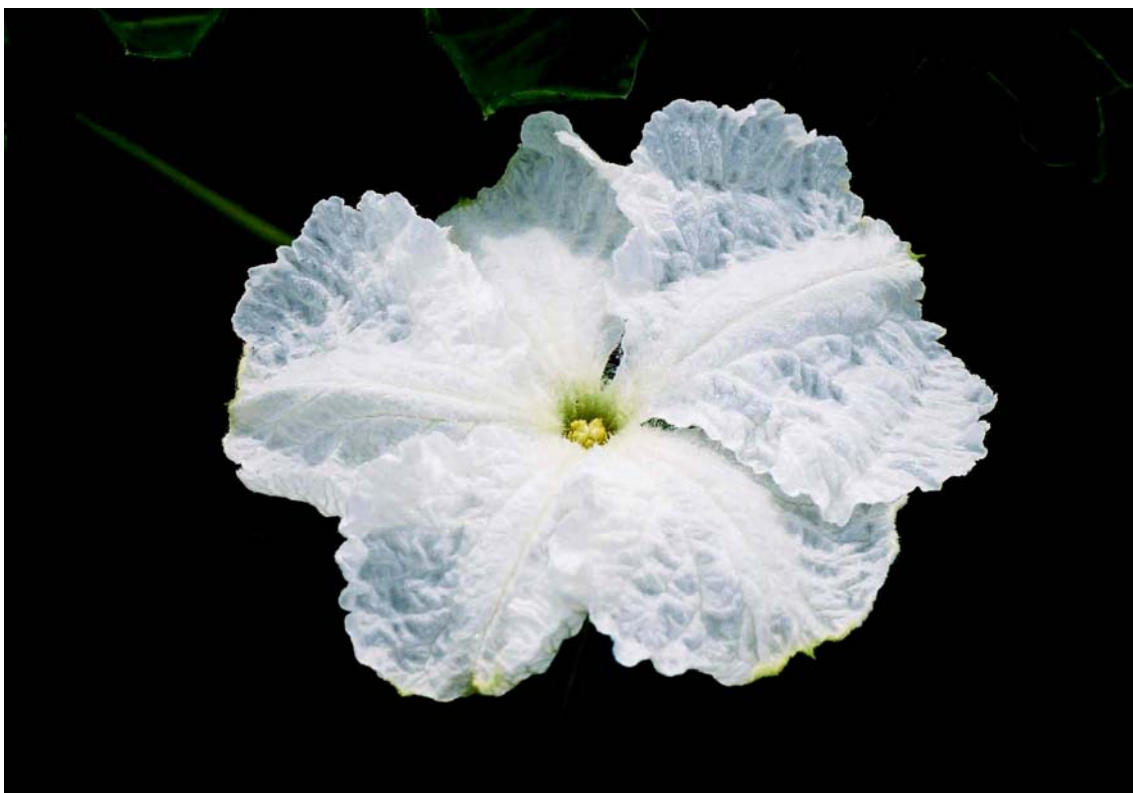
観賞用として栽培されるユウガオは、ヒルガオ科ユウガオ属で、ヨルガオとも言う。学名は『*Calonyction aculeatum*』で、種小辞は刺のあるという意味。明治の初めごろ渡来した。



観賞用のユウガオ、イギリスでは『moon flower』で、翌日には萎んでしまう短命な花である。



ユウガオの雌花、子房部分が膨らんで、果実になる準備ができている(栃木県壬生町)。



花卉全体に皺が多い夕顔の雄花。夕顔や南瓜、西瓜など大きな実をつける雌雄異花の植物は一番花の果実が大きくなると、雄花しか咲かなくなる。いわば自然の産児制限である(壬生町)。



実ってきたユウガオの果実、カンピョウにする(栃木県壬生町)。

[目次に戻る](#)